

研究ノート

# 初中級日本語学習者との接触場面における 母語話者の発話調整行動

——「会話パートナー」活動でのやりとりから——

久 保 亜 希  
篠 崎 佳 恵  
柴 田 冴

研究ノート

初中級日本語学習者との接触場面における  
母語話者の発話調整行動  
——「会話パートナー」活動でのやりとりから——

久 保 垂 希  
篠 崎 佳 恵  
柴 田 冨 冨

**Conversational Adjustment Features of Japanese  
Native Speakers in Contact Situations  
with Pre-Intermediate Japanese Language Learners:  
Cases of Interactions during “Conversation Partner”  
Sessions**

KUBO, Aki  
SHINOZAKI, Yoshie  
SHIBATA, Sae

Abstract

This study investigates how Japanese native speakers (NS) with no experience in Japanese language education adjust their own and interlocutor’s utterances in one-on-one natural conversations with non-native speaker (NNS) during “Conversation Partner (CP)” sessions, which allows international students to practice conversation with Japanese students at Tokyo International University. The analysis shows that NSs paraphrased their Japanese words and sentences using simple Japanese before communication problems arise. In addition, NSs often confirmed their own understandings by summarizing or completing NNS’s incomplete and/or inaccurate utterances, and in this case adjustments were more likely to succeed. On the other hand, adjustments were less successful when

NSs replaced the NNS's English with Japanese or when the NS replaced its own Japanese speech with English. We observed different characteristics from previous studies conducted on Japanese language educators, and these findings will help optimize our educational guidance for future CP staff and general Japanese native speakers.

*Keywords:* Adjustment, Japanese native speaker with no experience in Japanese language education, Pre-intermediate Japanese language learners, Contact situation, Easy Japanese

## 目 次

1. はじめに
2. 先行研究
  - 2.1 NSの発話の調整
  - 2.2 発話の調整の分析アプローチ
  - 2.3 本研究の位置づけと研究課題
3. 調査概要
  - 3.1 調査方法
  - 3.2 調査協力者
  - 3.3 データ概要
  - 3.4 分析方法
4. 結果
  - 4.1 データの概観
  - 4.2 事前自己調整
  - 4.3 意味交渉中に生じたNSの調整
    - 4.3.1 NNSの発話が原因で生じた意味交渉での調整
      - 4.3.1.1 調整の出現頻度と成否
      - 4.3.1.2 成功率が高い調整方法
      - 4.3.1.3 成功率が低い調整方法
    - 4.3.2 NSの発話が原因で生じた意味交渉での調整
      - 4.3.2.1 調整の出現頻度と成否
      - 4.3.2.2 成功率が高い調整方法
      - 4.3.2.3 成功率が低い調整方法
5. まとめと今後の課題

### 1. はじめに

近年、母語話者（以下、NS）が非母語話者（以下、NNS）の理解を促すために使用語彙や文法を調整する「やさしい日本語」が注目されている。これは生活者として日本に定住する外国人のために、日本語教育文法の観点から、媒介語としての日本語を再考したものである（庵，2009）。外国人定住者が増加しているにも関わらず、多言語化していない日本社会では、全国の自治体や就労現場、教育機関等で、「やさしい日本語」の利用が広まり、有用性も示されている。その一方で、「やさしい日本語」はNS同士の会話で使用される日本語とは性質が異なるため、NSであっても適切な運用にはその習得が必要であるとされる（徳永，2009）。しかしながら、これまで行われてきたNSとNNSとのコミュニケーションについて行われた研究の多くは、第二言語習得の立場か

らNNSの言語運用力に着目している。NSによる日本語の使用実態や、「やさしい日本語」などのNNSを意識した言語調整が実践されているかどうかは中心的な研究の対象とされておらず、その実態は明らかではない。

この「やさしい日本語」が使用されている場として、東京国際大学で行われている「会話パートナー（以下、CP）」制度がある。これは、外国人留学生と日本人学生が日常会話を通して異文化交流の機会を提供する場として設けられた場で、留学生が日本人学生と日本語の会話練習を行うことができる。留学生のための日本語の支援の場の提供を主な目的として開始されたが、日本人学生にとっても「やさしい日本語」を学び、実践することができる場としても活用されている。実際にCP活動に参加した日本人学生からは、「活動を始める前と後で自分が留学生に使う日本語に変化があった」と回答がされていた。日本人学生はCPとして外国人とのコミュニケーションを学ぶ過程で、自らの言語使用を客観的に捉えなおしていたことがわかり、NSの学びの場として有用ではないかという可能性が指摘されている（久保他、2020）。

このように、CP活動は留学生だけでなく、日本人学生にとっても有意義な活動であるといえる。しかしながら、実際に日本人学生と留学生との会話において、どのようなやりとりが行われているかは明らかになっていない。CP活動において、日本人学生と留学生がどのようにやりとりをして会話を進めようとするのか、そして会話の進行に困難をきたした場合、どのように調整を行うのか、もしくは行えないかを明らかにすることは、今後のCPへの指導のほか、多言語社会でのコミュニケーション方略を模索するうえでも重要であると考えられる。

このような背景を踏まえ、本研究では、CP活動でのやりとりを対象に日本語教育の経験がないNSがNNSである留学生との会話において、どのように発話を調整してコミュニケーションを行うのか、発話の調整に問題を抱えているのかを明らかにすることを目的とする。日本語教育についての経験や知識がない、もしくはほとんど持っていない日本人学生を対象に研究を行うことは、一般社会での接触場面においてどのようなコミュニケーションが行われるのかを明らかにするうえで、大変有意義であると考えられる。

## 2. 先行研究

### 2.1 NSの発話の調整

前述のように、NSとNNSとのコミュニケーションについては第二言語習得の立場からNNSの言語運用力に着目したものが多く、その中で、NSの発話に着目した研究を概観したい。NSが接触場面においてどのような調整行動をとるのかについては、NNSとの接触経験の多寡との関連で述べたものが目立つ。NSの調整行動と接触経験の関係を分析したものに村上（1997）、増井（2005）、柳田（2010）、雷（2021）がある。

村上（1997）は、NSを日本語教育経験の有無と接触経験の多寡によって4群に分け、日本語上級レベルのNNSとの間で双方向性のインフォメーションギャップタスクを課して「意味交渉の方法」（「訂正」、「貢献・完成」、「精密化」、「確認チェック」、「明確化要求」）の頻度を調べた。その結果、「意味交渉の方法」の頻度が最も高かったのは日本語教師ではないが接触経験が多い群（留学生別科等の職員）で、特に「精密化（NNSの発話に対してNSが情報を加えて繰り返したり完成させたりする）」の頻度が高かったという。そして、これは調査協力者が彼らの職務で留学生と関わる必要があることが多く、「本当に意味のあるコミュニケーション」を日常的に行っていた結果ではないかと考察している。

接触場面における日本語を「共生言語」と捉えた増井(2005)は、NSもまたNNSにとって理解しやすい日本語の運用方法を身に付けていく存在と位置付けて研究を行った。具体的には接触経験のない5人のNSを対象に、修復的調整<sup>1)</sup>の方略が短期間の集中的接触(7~10日で5回)でどのように変化するかを分析した。NSが絵を説明し、各回初対面のNNS(日本語中級レベル)がその説明を聞いて同じ絵を再生するという描画タスク中の会話を分析した結果、接触経験を重ねるうちに意味交渉中の調整の頻度が増え、方法も多様化すること、特に言い換えの頻度が増えたことを報告している。

また、接触経験の有無に着目した柳田(2010)は、日本語教育の知識を持たないNSを接触経験の多寡で2群に分け、日本語上級レベルのNNSとの双方向性インフォメーションギャップタスクを課した調査を行っている。接触場面での「情報やり場面」におけるコミュニケーション方略を比較した結果、接触経験の多いNSは一文を短く発話することや、躊躇なく理解確認をしていること、自発的に発話修正を行うことを報告している。

接触経験の多寡に加え、学習者の日本語能力による相違に注目した研究には、雷(2021)がある。雷(2021)はNSを接触経験の多寡で2群に分けたうえで、相手のNNSの日本語能力によって「自己修復」<sup>2)</sup>の使用回数、方法、発話連鎖に影響があるかを分析している。その結果、接触経験の少ないNSより、接触経験の多いNSのほうが「自己修復」の回数が多く、また接触経験の多いNSは上級NNSよりも初中級NNSに対して「自己修復」を有意に多く用いる傾向があること等を明らかにした。学習者の習熟度によって、NSが使用する「自己修復」には異なる傾向が見られるとしている。

このように、接触経験によってNSが調整の方略を学習していくこと、接触経験の多いNSには一定の傾向が見られることが明らかになっている。しかしながら、どのような調整方略が実際に意味交渉に利するのかは具体的には明らかになっていない。また、多くの研究では調査協力者のNNSが日本語中級レベル以上であるが、雷(2021)が指摘しているように、日本語レベルがより低い場合には、異なる調整行動が行われることも予測される。よって初(中)級レベルを対象とした研究の蓄積が必要である。

そのような中で、大平(1999)は、日本語入門レベルの学習者を対象にし、かつ意味交渉の成否と成功率に着目した点で興味深い研究である。日本語入門者クラスで行われたオーラルインタビュー(NSがNNSに質問する)をデータとして、質問と応答の連鎖におけるNSの「言い直し」による自己調整を対象に分析を行った。「言い直し」を「自己訂正」と「意味交渉」に大別し、さらに11の下位分類(「同義語、類義語の使用」「対義語の使用」「パラフレーズ」「具体化」「一般化」「単純化」「詳述化」「文構造の変化」「アプローチの変化」「他言語の使用」「繰り返し」)に分類したうえで、その頻度と成功率を分析している。その結果、最も頻度が高かったのは「繰り返し」であったこと、一方で「繰り返し」は成功率が低かったこと、そして最も成功率が高かったのは英語などの他言語を使用した場合であったことを報告している。これは、日本語レベルが低いNNSに対して、成功率が高い調整方法を明らかにした点で注目に値するだろう。しかしながら、この研究では調査協力者であるNS5名のうち3名が日本語教育経験を有しており、その知識が方略の使用に影響した可能性が大いに考えられる。日本語教育経験のないNSへの教育をどのように行うべきか、日本語教育経験のないNSの実態を明らかにしたうえで、対応を検討する必要があるだろう。

## 2.2 発話の調整の分析アプローチ

次に、接触場面の会話データの記述・分析アプローチに関わる研究に目を向けたい。例えば、宮崎（1999）は、第二言語習得研究の立場から、NSとNNSの接触場面でやりとりに支障が生じた際の調整行動に着目し、そのモデル化を行っている。Schegloff *et al.* (1977) やMcHoul (1990) 等の会話分析の研究に基づき、調整行動のパターンを「調整軌道」と呼び、発話の不適切さを誰がマークするかという観点と、誰が調整を行うかという観点から、4つのタイプに分類している。すなわち、問題のある発話に対して他者が指摘をし、問題がある発話をした話者が自身で調整をする「他者マーク自己調整型」、問題のある発話に対して自身が指摘・調整をする「自己マーク自己調整型」、問題のある発話に対して自身が指摘をするが他者が調整をする「自己マーク他者調整型」、問題のある発話に対して他者が指摘・調整をする「他者マーク他者調整型」である。さらに、調整軌道に入るための「調整マーカー」の分類と、調整の連続性や参加者の多様性に関わる「調整デザイン」の分類を行い、調整行動を包括的に理解するための方法を提示した。この研究は第二言語習得研究の立場から調整行動をモデル化しようとするものであるが、NSの調整行動を分析する際にも有用である。

## 2.3 本研究の位置づけと研究課題

本研究は、本学のCP活動で日々行われている「日本語教育経験のないNS」と「初中級NNS」の接触場面を対象とする。2.1より、このような組み合わせの会話データを用いてNSの言語調整を分析した研究はあまり行われておらず、本研究はこれまでの研究で明らかにされてこなかったこの部分に光を当てることとした。また、分析方法として「調整軌道（宮崎，1999）」の概念を取り入れ、タイプ別の特徴や成功率をとらえることで、新しい知見が得られるのではないかと考える。

そこで、本研究では接触場面の会話において、日本語教育の経験を有していないNSがどのように会話を調整するのか、どのような調整方法の成功率が高いのかを明らかにするため、以下の2点を研究課題とした。

- (1) NSはやりとりに支障が生じる前に、どのように自分の発話を調整しているのか。
- (2) NSはやりとりに支障が生じた場合、どのように意味交渉を行い、調整しているのか。

研究課題（1）に関して、具体的にはどのような調整方法が多く用いられるのか、またそれらがどの程度成功しているのかに注目した。なお、研究課題（1）で分析対象とする「やりとりに支障が生じる前の調整」を本研究では「事前自己調整」と呼ぶ。研究課題（2）に関しても研究課題（1）と同様に調整の方法と成否に注目したが、さらに意味交渉がNNSの発話が原因で生じたのか、NSの発話が原因で生じたのかという観点と、また、その問題に対してNSとNNSのどちらがマークをしたのかという観点からも区別して分析を行った。

## 3. 調査概要

### 3.1 調査方法

本研究では、日本語教育経験者ではないNSの調整行動を概観することを目的として、CP活動中の日本人学生と外国人留学生のやりとりを記録した。会話データの収集にあたり、まず各学期の開始前に行われる事前研修で、CP活動に参加する日本人学生の中から協力者を募った。その後、協力者となった日本人学生が、各学期のCP活動中に任意でCP活動に参加した外国人留学生への調査説明と協力依頼を行い、同意が得られた場合に会話を録音又は録画した。これと同時に、

研究者らが担当する日本語科目のクラスでも、研究者ら自身による調査協力者の募集が行われた。研究者による調査説明を経て協力者となった留学生は、協力者の日本人学生が担当する勤務シフトの中から都合の良い日時を選んで調査に参加した。

また、CP活動における自由会話のデータ収集以外に、調査協力者となったNSとNNSに対して、CP活動開始前及び終了後にアンケート調査を実施した。NS対象の事前アンケートでは、CPとしての活動歴や接触経験の有無等に関する背景調査を行い、事後アンケートではNNSとの会話中に困難を感じた点、自分の発話で意識した点等について調査した。一方、NNSに対するアンケートは、調査協力に同意したやりとりの直後にNSの協力者が回答を依頼し、日本語学習歴や、対話者(NS)の発話を理解するうえで実際に役立った調整行動(言い換え、繰り返し等)について記述してもらった。

### 3.2 調査協力者

NSの調査協力者は全員が日本語教育が専攻ではない日本人学生(女性)で、日本語教育に関する授業を受講した経験なども持っていなかった。4名中2名は、データ収集時点でCP活動への参加が初めてであったが、4名共NNSとの接触経験を有していた。NNS6名は、日本語学習歴1年から3年程度の外国人留学生で、本学で開講されている日本語科目の初級後半、もしくは中級前半クラスに在籍する学生であった。収集した会話データ中の日本語でのやりとりから、全員の日本語能力は初中級レベル相当と判断した。以下、調査協力者の属性を表1にまとめる。

### 3.3 データ概要

調査協力者のNSによって録音又は録画された6組の会話データの総時間数は104分55秒(1組あたりの平均時間約17分49秒)であった。調査は2021年から2022年にかけて行ったが、途中コロナ禍の影響でCP活動の対面実施を中止していたため、収集した6組の会話データのうち、ペア1~3の3組はオンライン、残り3組は対面での会話であった。CP活動の利用者は、日本人との会話練習を目的とする学生の他に、履修している日本語科目の課題遂行を目的とする留学生もいるが、本研究では接触場面での自由会話におけるNSの発話調整行動に注目しているため、前者のみを分析対象とした。また、CP活動では、その設置目的に鑑みて原則日本語の使用が求められた。しか

表1 調査協力者について

会話ペア番号	ペア 1	ペア 2	ペア 3	ペア 4	ペア 5	ペア 6
NS	NS1	NS2		NS3		NS4
年齢	20	19		19		20
性別	F	F		F		F
CP活動歴	4期目	2期目		1期目		1期目
接触場面での使用言語	日本語/英語	日本語/英語		英語		日本語
NNS	NNS1	NNS2	NNS3	NNS4	NNS5	NNS6
年齢	22	24	19	22	21	20
性別	F	M	F	F	F	M
国籍	ネパール	アメリカ	モンゴル	ハンガリー	ベトナム	バングラデシュ
日本語学習歴	2~3年	1~2年	3年以上	1~2年	1~2年	1年未満

し、会話中にメモを取ることや、パソコン及びスマートフォン等での画像検索、辞書の利用に対する制限はなかった。

### 3.4 分析方法

収集した会話データの一部は、任意で記録者本人によって文字化されたが、最終的な処理と記号の付与は研究者が行った。文字化したデータの中から、事前自己調整（NSが意味交渉が生じる前に自ら発話の修正を行っている箇所）と意味交渉（NSまたはNNSの発話が原因で会話が中断し、NSとNNSが互いに聞き返しや理解チェックによって意味交渉を行っている箇所）を抽出した。次に、意味交渉場面でのやりとりを宮崎（1999）を参考に3つの観点から分類した（図1）。まず、意味交渉が生じた原因となる発話を特定し、その発話がNSによるものかNNSによるものか、つまり、意味交渉が「NSの発話が原因」で生じたものか「NNSの発話が原因」で生じたものかに分類した。次に、その原因となった発話に対して、聞き返しや質問などによって指摘している発話を特定した。この発話を、自己発話に対して自ら問題を指摘した場合は「自己マーク」、相手から指摘があった場合は「他者マーク」と分類した。最後に、調整された発話を抽出した。この発話は、自己発話の問題に対して自ら調整した場合は「自己調整」、相手が調整した場合は「他者調整」と分類した。調整の原因となった発話に対して、NSが複数の異なる調整を順に試みた場合があったが、異なるターンで行われた場合は、調整の連鎖全体を通して1回の調整と捉えるのではなく、別の調整としてカウントした。

なお、聞き返しや質問によるマークが行われず、すぐに調整を行う場合も散見されたが、その場合は調整を行った話者自身が、調整前の発話に問題があると判断したと考えられるため、その調整を行った話者がマークをしたものとして分類した。

次に、事前自己調整として抽出した発話と、意味交渉の中から抽出した調整をその方法によって分類した。接触場面におけるNSの調整行動の特徴を明確化するために、本研究ではNSによる調整方法の上位カテゴリーを2種類（言い換え、繰り返し）に分類し、さらに先行研究（大平1999；増井2005；柳田2009）を参考に10種類の下位カテゴリーを生成した。また、言語以外の方法によって調整を行うやりとりも見られたため、この場合は「その他」とした。本研究における調整発話の分類を表2に示す。

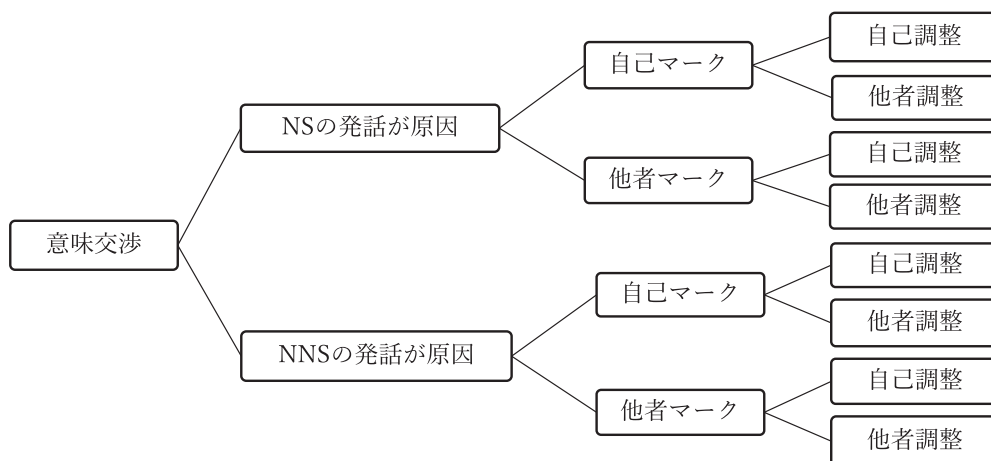


図1 意味交渉場面でのやりとりの分類



表2 NSによる調整発話の分類

上位カテゴリー	下位カテゴリー	定義
言い換え	英語→日本語	英語を日本語で言い換える
	日本語→英語	日本語を英語で言い換える。英語で説明する。
	日本語→日本語	日本語を他の日本語で言い換える (単語レベルの言い換え、スタイルシフト)
	説明	どのような意味なのか、文レベルで説明をしている
	要約・完成	要約・完成。相手が話した文を短く言い換える。情報をまとめる。発話が不明瞭な時やうまく話せていない時に文を完成させる。
	訂正	文法的な誤りや語彙的な誤りを正す
繰り返し	繰り返し	発話をそのまま繰り返す
	統合繰り返し	統合繰り返し。直前の発話を組み合わせて繰り返す。
	部分繰り返し	部分繰り返し。直前の発話の一部を繰り返す。
	調整発話の繰り返し	調整発話を繰り返す
その他	-	言語以外の調整 (絵を描く、インターネットで調べる)

表2の10種類の下位カテゴリーに分類される調整発話がどのようなものを指すのか、会話例とともに順に解説する。

(1) 英語→日本語

英語を日本語で言い換える調整発話。会話例1(「recommend」→「おすすめ」)のような単語レベルの言い換えだけでなく、文レベルの言い換えも含まれる。

会話例1 (以下、会話例中の調整の原因となった発話に点線, 調整発話に実線)

- |    |                                                          |
|----|----------------------------------------------------------|
| 01 | NNS-2:そうですね, あ::, 神社。【NS-2】さん, えーと, 私はまだ日本まだたくさん         |
| 02 | 日本見えません。だから【NS-2】さん, あ::: oh my god, <u>recommen....</u> |
| 03 | NS-2: あ:, <u>レコメン</u> ド, オススメかな? オススメ。                   |
| 04 | NNS-2:あ: お願いします。                                         |

(2) 日本語→英語

日本語を英語で言い換えたり, 英語で説明したりする調整発話。会話例2(「就活」→「job hunting」)のように英単語をそのまま言い換える場合もあるが, 英語で言葉の説明を加えることもある。

会話例2

- |    |                                   |
|----|-----------------------------------|
| 01 | NS-3: へ::そっか。今は, <u>就活</u> ?      |
| 02 | NNS-4:就活?                         |
| 03 | NS-3: 就活, <u>job hunting</u> してる? |
| 04 | NNS-4: あ::yeah. はい。               |

(3) 日本語→日本語

日本語を別の日本語の表現に言い換える調整発話。聞き手が理解できなかった言葉や表現を「やさしい日本語」に置き換える方法以外に, 会話例3(「一緒に帰るんですか?」→「一緒に帰るの?」)のように丁寧体から普通体(またはその反対)へのスタイルシフトもこのカテゴリーに分類される。

会話例3

- |    |                                         |
|----|-----------------------------------------|
| 01 | NS-3: え∴, あ:, 【人名 A】と【人名 B】もベトナムに帰るでしょ? |
| 02 | 一緒に帰るんですか?                              |
| 03 | NNS-5: ん?                               |
| 04 | NS-3: <u>一緒に帰るの?</u>                    |
| 05 | NNS-5: うん, はい.                          |

(4) 説明

どのような意味なのか, 文レベルで説明をしている調整発話。会話例4のように相手が理解できなかった言い方に例を追加したり, 意味交渉のきっかけとなった言葉の属性説明 (増井, 2005) をしたりしている場合は「(4) 説明」となる。

会話例4

- |    |                                                 |
|----|-------------------------------------------------|
| 01 | NS-2: え, すごい, <u>何か国語しゃべれるの?何個.</u>             |
| 02 | NNS-3: ん∴ ((顔をしかめて))なんかこ?なんこ?                   |
| 03 | NS-2: <u>えっとなんこ, しゃべれる?ことば. 例えば英語とか, 日本語とか.</u> |
| 04 | NNS-3: あ:, さん?に?英語, 日本語と思います.                   |

(5) 要約・完成

相手が話した文を短く言い換えたり, 情報をまとめたり, 発話が不明瞭な時やうまく話せていない時に文を完成させたりする調整発話。会話例5では, NNS-2が一文で短く話せなかった内容をNS-2が端的にまとめて調整している。

会話例5

- |    |                                              |
|----|----------------------------------------------|
| 01 | NNS-2: あ, あ, <u>今日は, あ:授業があります.</u>          |
| 02 | えー, <u>私の日本語クラス, 私の日本語の授業は, まだ終わりです.</u>     |
| 03 | <u>でした, と, ん:後で, あ:他の授業があります.</u>            |
| 04 | NS-2: あ:, <u>じゃさっき日本語の授業が終わって, 次にまた他の授業が</u> |
| 05 | <u>あるんだね.</u>                                |
| 06 | NNS-2: そうです.                                 |

(6) 訂正

文法的, あるいは語彙的な誤りを正す調整発話。会話例6のように動詞を正しく言い換える発話や, 非文法的な表現, 漢字語彙の読み間違いを正しく言い直すなどの行動を指す。

会話例6

- |    |                                            |
|----|--------------------------------------------|
| 01 | NNS-3:あの昼ご飯の後で: <u>あの人力車: に: 行きました?</u>    |
| 02 | NS-4: <u>人力車に乘りました?</u>                    |
| 03 | NNS-3: あ: 乗りました乗りました. はい. あ: [とっても¥楽しかった¥. |
| 04 | NS-4: [とっても楽しい: へ∴                         |

(7) 繰り返し

直前に発話された言葉や表現をそのまま繰り返す調整発話。会話例7の3行目のように, 既出の発話と同じ言い方が採用された調整方法である。

#### 会話例7

- |    |        |                    |
|----|--------|--------------------|
| 01 | NS-3:  | 3人で?               |
| 02 | NNS-5: | ん?                 |
| 03 | NS-3:  | 3人で? 【人名A】と【人名B】と. |
| 04 | NNS-5: | (いや)               |
| 05 | NS-3:  | あ家族と?              |
| 06 | NNS-5: | 家族と. (笑い)          |

#### (8) 統合繰り返し

直前の発話の一部を組み合わせて繰り返す調整発話。会話例8では、3行目にNS-1が直前のNNS-1の発話をそのまま繰り返すことで内容を確認し、4行目で新たに提示された「経済に」という情報を追加しながら再度繰り返すことで、2行目の発話を調整している。

#### 会話例8

- |    |        |                                     |
|----|--------|-------------------------------------|
| 01 | NS-1:  | え:: (2) 国際関係だよね, 学部は.               |
| 02 | NNS-1: | はい::, でも::, あ:: <u>ちょっとチェンジしたい.</u> |
| 03 | NS-1:  | チェンジしたい?                            |
| 04 | NNS-1: | はい, <u>経済::に.</u> (笑い)              |
| 05 | NS-1:  | <u>経済にチェンジしたいの?</u>                 |
| 06 | NNS-1: | はい.                                 |

#### (9) 部分繰り返し

直前の発話の一部を繰り返す調整発話。会話例9では、2行目でNNS-2が発した内容の中から、NS-2は「東京の神社」のみを取り出して上昇調で繰り返している。

#### 会話例9

- |    |        |                                                   |
|----|--------|---------------------------------------------------|
| 01 | NNS-2: | あ, ん:, あ(3) 私はえーっと:: 東京のあ: じん, あいえいえ, すいません,      |
| 02 |        | には, 日本, 神社, 好き, から, <u>東京の神社, あ: 見た: ほしい: です.</u> |
| 03 | NS-2:  | <u>東京の神社?</u>                                     |
| 04 | NNS-2: | 東京の神社.                                            |
| 05 | NS-2:  | うんうんうん, に, 行きたいのかな?                               |

#### (10) 調整発話の繰り返し

直前に行われた調整を繰り返す発話。会話例10では、一度3行目でNS-3が「点数」という言葉を「スコア」と英語に言い換えて調整しているが、4行目でNNS-5が「(てんすく)?」と上昇調で発話し、不理解表明が行われたため、5行目で再び「スコア」という調整発話が繰り返されている。

#### 会話例10

- |    |        |                                       |
|----|--------|---------------------------------------|
| 01 | NNS-5: | お?, [合格?                              |
| 02 | NS-3:  | [で::も::, なんか, すごく難しかった. から:, でも前とほとんど |
| 03 |        | 同じ. <u>点数, スコア</u> だった.               |
| 04 | NNS-5: | (てんすく)?                               |
| 05 | NS-3:  | <u>スコア.</u>                           |
| 06 | NNS-5: | score, うんうん.                          |

調整は上記の10項目とその他に分類したが、実際の調整ではNSが1回の調整発話で複数の方略を組み合わせている場合（例えば「要約・完成」しながら文法を「訂正」している調整）もあった。このような調整は複数の調整を組合せた方略として分類した。

最後に、調整の結果の成否を分析した。CP活動における接触場面でのコミュニケーションは、調整によりやりとりが成功したと捉えられる場面とそうでない場面があった。調整発話の種類によって、やりとりの成否にどのような差が見られるのかを観察するため、本研究では、調整の成否を次のように定義した。まず、正しく行われた調整に対して、NNSが相槌を打ったり理解を示したりした場合、また会話が問題なく進んでいる場合は調整の結果を「成功」と捉えた。次に、相手が調整内容を理解できなかった場合、また調整内容自体が間違っている場合は「失敗」と捉えた。適切な調整の直後にNNSから明確な反応がない場合は「不明」と定義した。NSが行ったすべての調整発話について、研究者3名がそれぞれの成否を個々に判定し、意見が合わなかったものは3名全員で協議のうえで結果を決定した。

## 4. 結果

### 4.1 データの概観

まず、分析対象とした会話データの概観を示す（表3）。

データから事前自己調整を抽出したところ、計19回の調整が観察された。次に、会話データから意味交渉を抽出したところ、全部で139回観察された。そのうち、NNSの発話が原因で生じた意味交渉が117回見られ、そのうちNSが調整を行った回数は66回、NNSが調整を行った回数は47回であった。なお、調整が行われなかったやりとりは4回見られた。一方、NSの発話が原因で生じた意味交渉は22回見られ、そのうちNS自身が調整したのは17回、NNSが調整を行ったのは5回であった。意味交渉のほとんどがNNSの発話が原因で開始されており、それに対してNSが積極的に調整を行っていたことが推察される。

さらに、それぞれの意味交渉が誰に指摘されて開始されたのか、つまり誰がその発話を問題のある発話としてマークしたのかを分析するため、自己マークによって開始されたか、他者マークによって開始されたかに分類した。その結果、NNSの発話が問題で開始された意味交渉では、NSが他者マークをしたやりとりが48回見られた。一方、NNS自身が自分の発話に問題があることを指摘する自己マークは69回見られた。NSがNNSの発話の問題を指摘するよりも、NNSが自分の発話に問題があることを積極的に示す傾向が見られた。一方、NSの発話が原因で開始された意味交渉では、NSによる自己マークは4回、NNSによる他者マークは18回と、NNSが不理解を表明して開始されたものが多かった。

表3 事前自己調整と意味交渉における調整の頻度

	意味交渉						事前自己調整
	NNSの発話が原因			NSの発話が原因			
	NSによる 他者マーク	NNSによる 自己マーク	小計	NSによる 自己マーク	NNSによる 他者マーク	小計	
NSの調整	30	36	66	3	14	17	19
NNSの調整	17	30	47	1	4	5	
無調整	1	3	4	0	0	0	
合計	48	69	117	4	18	22	19

### 4.2 事前自己調整

まず、意味交渉が生じる前にNSが自分の発話を修正した事前自己調整の結果を述べる（表4）。

表4 事前自己調整の調整方法の頻度とその成否

上位カテゴリー	下位カテゴリー	成功	失敗	不明	合計
言い換え	日本語→日本語	10	1	2	13
	日本語→英語	1	1	1	3
	説明	3	-	-	3
	合計	14	2	3	19

事前自己調整は19回と頻度は多くなかったが、その中でも一番多く見られたのは「日本語→日本語」への言い換えの13回で、成功率は77%（成功10、失敗1、不明2）であった。次に多かったのは「説明」の3回で、すべて成功をしていた。「日本語→英語」も3回見られたが、成功は1回のみであった。

では、一番多く見られた「日本語→日本語」がどのように調整されていたのか、その例をあげる。この言い換えで一番多く見られたのは、日本語の表現をより簡易な表現に言い換える調整であった。

会話例11 事前自己調整での「日本語→日本語」の成功例

01 NS-2: それ以外だと:あ,私【県名】しゅっし,【県名】に,住んでるんだけど,  
 02 NNS-2: あ:【県名】.  
 03 NS-2: そう,【県名】にも:なんかね,たくさん温泉があるんだよね,温泉.  
 04 NNS-2: あ:そうですね.

この例では、NS-2が自分の「出身」と述べようとしたところを、「住んでいる」という、より簡易な語彙で言い換えていた。NS-2は、NNS-2が「出身」という語彙が理解できないのではないかと推測し、不理解が表明される前に言い換えたと考えられる。

もう一例、「日本語→日本語」の調整例をあげる。

会話例12 事前自己調整での「日本語→日本語」の成功例

01 NS-3: 私写真を:Instagram で:見ました.お寿司?どんぶり?どんぶり?  
 02 NNS-4: (あ:: はいはい.)  
 03 NS-3: そうそう. おいしかった? おいしかったですか?  
 04 NNS-4: [はい, はい]

この例のように「おいしかった?」という普通体の発話を「おいしかったですか?」と丁寧体で言い直す発話も見られた。相手が不理解を示す前に言い換えを行うことで、スムーズなやりとりにつながったと考えられる。しかしながら、この例では言い換えを行う前に、「はい」という返答がされていることからわかるように、元の発話でも理解に影響はなかった可能性も考えられる。

このように、事前自己調整では日本語を用いた言い換えが行われており、NSが「やさしい日本語」を用いて調整をしようとしたことがわかった。NNSもその調整された発話に対して相槌を打つなどの反応を示しており、NSの事前自己調整がNNSの理解に役立っているのではないかと考えられる。

### 4.3 意味交渉中に生じたNSの調整

次に、意味交渉中のNSの調整に注目する。表3で示したように、本研究では意味交渉が117回観察され、そのうちNSが調整した回数は66回、NNSの調整は47回であった。本研究ではNSの調整方法を明らかにするため、「NSの調整」に注目して分析を進めた。

### 4.3.1 NNSの発話が原因で生じた意味交渉での調整

#### 4.3.1.1 調整の出現頻度と成否

ここでは、NNSの発話が原因で生じた意味交渉、つまり、NSがNNSの発する情報を読み取る必要がある場面でNSがどのように調整をしたのか、その結果を報告する。

NSの調整方法を分析した結果を表5にまとめた。「言い換え」による調整は62回（単独52回、言い換え同士の組合せ7回、繰り返しとの組み合わせ3回）見られた。一方、「繰り返し」による調整は7回（単独4回、言い換えとの組み合わせ3回）で、調整のほとんどが「言い換え」によるものであることがわかった。一番多く使用された調整方法は「要約・完成」、 「訂正」の各20回で、どちらも単独での使用が14回、他の調整方法との組み合わせでの使用は6回見られた。次に多く観察されたのが「英語→日本語」の17回（単独14回、組み合わせ3回）であった。続いて、「説明」が6回（単独のみ）、「部分繰り返し」が5回（単独3回、組み合わせ2回）、「日本語→日本語」が4回（単独3回、組み合わせ1回）、「統合繰り返し」が1回（単独のみ）、「調整繰り返し」が1回（組み合わせのみ）であった。

調整の成功率<sup>3)</sup>を算出したところ、「訂正」は85%（成功15、失敗3）、「要約・完成」は80%（成功13、失敗3、不明1）と高かったが、「英語→日本語」は64.7%（成功10、失敗5）と比較的低い

表5 NNSの発話が原因で生じた意味交渉での調整方法の頻度とその成否

上位カテゴリー	下位カテゴリー	NSによる他者マーク				NNSによる自己マーク				合計
		成功	失敗	不明	計	成功	失敗	不明	計	
言い換え	要約・完成	6	1	-	7	5	1	1	7	14
	英語→日本語	1	-	1	2	7	5	-	12	14
	訂正	9	1	-	10	3	1	-	4	14
	説明	1	1	-	2	2	1	1	4	6
	日本語→日本語	2	-	-	2	1	-	-	1	3
	日本語→英語	1	-	-	1	-	-	-	-	1
繰り返し	部分繰り返し	1	-	-	1	2	-	-	2	3
	統合繰り返し	1	-	-	1	-	-	-	-	1
言い換え +言い換え	英語→日本語, 日本語→日本語	1	-	-	1	-	-	-	-	1
	英語→日本語, 訂正	-	-	-	-	1	-	-	1	1
	要約・完成, 英語→日本語	-	-	-	-	1	-	-	1	1
	要約・完成, 訂正	2	-	-	2	1	1	-	2	4
言い換え +繰り返し	要約・完成, 調整繰り返し	-	-	-	-	1	-	-	1	1
	訂正, 部分繰り返し	1	-	-	1	-	-	-	-	1
	日本語→日本語 部分繰り返し	-	-	-	-	-	1	-	1	1
	合計	26	3	1	30	24	10	2	36	66

傾向が見られた。

次に、NSによる他者マークによって開始された調整か、NNS自身による自己マークによって開始された調整かによって成功率が異なるのかに注目した。それぞれの成功率を算出したところ、NSによる他者マークは成功率が86.7%（成功26，失敗3，不明1）であったのに対し、NNSによる自己マークは成功率が67.7%（成功24，失敗10，不明2）と低い傾向が見られた。これは、後述するように「英語→日本語」の言い換えによる調整の成功率が53%と半数程度であることが影響していると考えられる。

#### 4.3.1.2 成功率が高い調整方法

では、これらの調整がどのように行われたのか、まず成功率が高かった調整に着目する。

NNSの発話の原因で生じた意味交渉では、「要約・完成」が多く使用され、成功率も高かった。成功率は、自己マークで開始された場合も、他者マークで開始された場合もどちらも高く、相違は見られなかった。下記に会話例をあげる。

会話例13 意味交渉での「要約・完成」の成功例

- |    |                                               |
|----|-----------------------------------------------|
| 01 | NNS-2: <u>でも、あ:私の国に、あ:と、すみません、私の国、あ:と、</u>    |
| 02 | Oh my god. ((頭を振る))                           |
| 03 | NS-2: (笑い) 大丈夫だよゆっくりで(笑い)。                    |
| 04 | NNS-2: <u>私の国で、日本に行った時、私の、ホテルは、東京です。</u>      |
| 05 | NS-2: <u>じゃあ日本に初めて来た時はホテルで、東京のホテルで、す、アレか。</u> |
| 06 | NNS-2: そうですね、日本人、あ、もう一度お願いします。                |
| 07 | NS-2: <u>あの: 初めて日本に来た時は、その東京にあるホテルで、</u>      |
| 08 | <u>過ごしてたっていうか、住んでた、だよな? [東京のホテルで、</u>         |
| 09 | NNS-2: [うんうん。                                 |
| 10 | NS-2: うんうん、そこから【地名】に移動したのかな。                  |
| 11 | NNS-2: そうです。                                  |

まず、1行目でNNS-2が「でも、あ:私の国に、あ:と、すみません、私の国、あ:と」と何か述べようとしているが、うまく述べられず「oh my god」と自分の発話に問題があると自己マークをしている。続けて「私の国で、日本に行った時、私の、ホテルは、東京です」と発話を続けようとしているが、断片的な発話になってしまっている。NS-2はその発話からNNS-2の発話意図を読み取り、7-8行目で「あの: 初めて日本に来た時は、その東京にあるホテルで、過ごしてたっていうか、住んでた、だよな?」と、NNS-2の発話を統合してまとめ、調整に成功している。この会話では、5行目で調整を一度断念しており、NSは言い換えに苦慮している様子が見られるが、「だよな?」と相手に確認をしながら進めるなど、工夫しながら調整しようとしていた。

このように、「要約・完成」による調整では、NNSが断片的に述べている発話をわかりやすくまとめたり、文として適切な形で完成させたりして発話する様子が見られた。成功率は比較的高く、NNSの発話意図が読み取れる場合にはこの調整によって発話を円滑に進められている様子が観察された。

次に、「要約・完成」と同じく、成功率が高かった「訂正」の例を紹介する。この会話例は、NNSの文法の誤りを正しい発話に修正した例である。

会話例14 意味交渉での「訂正」の成功例

01	NS-2:	あ:確かに. じゃあ東京でもいいけど, なんかどこか遊びたいところ
02		とかも, 特にない? 東京でもいいけど.
03	NNS-2:	あ, ん:, あ (3) 私はえーっと:: 東京のあ: じん, あいえいえ, すいません,
04		には, 日本, 神社, 好き, から, 東京の神社, あ: <u>見た: ほしい: です.</u>
05	NS-2:	東京の神社?
06	NNS-2:	東京の神社.
07	NS-2:	うんうんうん, <u>に, 行きたいの</u> [かな?
08	NNS-2:	[とお寺, うん.

この会話では、NS-2のどこか遊びに行きたいところがないかという問いに対し、NNS-2が3-4行目で「東京の神社, あ: 見た: ほしい: です.」と非文法的な発話で答えている。NS-2は5行目で「東京の神社?」と相手の発話の一部を繰り返して他者マークによって問題点を指摘し、それに続く発話を引き出そうとしているようだが、NNS-2からの修正は見られず、7行目でNS-2が「に行きたいのかな」と訂正をしている。このNSによる訂正によってNNSの発話意図が確認され、その後NNSは「とお寺」と補足をしたうえで「うん」と意思疎通が完了したことを確認している。

このように、母語話者が文法や語彙を訂正する場合は、NNSもその調整をスムーズに受け入れ、発話が円滑に進む様子が観察された。このような誤りは意味理解自体には支障がない場合が多かったため、コミュニケーションにも支障が生じなかったとも考えられる。

このように、「要約・完成」や「訂正」による調整は多く行われ、成功率も高い傾向が見られた。これらの調整はNNSの発話が原因で生じた意味交渉中に生じたものであったが、NSがNNS意図を適切に汲み取り、適切な言い換えができたときに成功しやすいと考えられる。

4.3.1.3 成功率が低い調整方法

次に、失敗が多く見られた調整方法に注目する。「英語→日本語」を用いた調整はNNSによる自己マークで多く観察された。「要約・完成」「訂正」と同様に多く観察された調整方法であったが、成功率が低い傾向が見られた。会話例15は、NNSの自己マークによって始まった意味交渉で、NNSが自分の好きなアニメについて話している例である。

会話例15 意味交渉での「英語→日本語」の失敗例

01	NNS-6:	はい, バックグラ, バックグラウンドがとても, <u>dark, dark?</u>
02	NS-4:	ダーク, <u>闇?</u>
03	NNS-6:	闇?
04	NS-4:	多分その <u>ダーク</u> は暗い, あ暗いでもいいですね, 暗いですか.
05	NNS-6:	うんうん, 暗いです.

この会話では、まずNNS-6がアニメのバックグラウンドが「dark」と述べているが、適当な日本語表現が見つからず、上昇調の発話で自己マークをして、NS-4に助けを求めている。NS-4は「ダーク」と一度繰り返したのち、「闇」という日本語を提示することで調整しているが、NNSは理解できなかったようで、「闇?」と聞き返している。NS-4はその反応を受け、「暗い」というより簡易な表現にさらに言い換えをしている。NS-4が最初にNNS-6の理解語彙よりも難しい語彙を提示しているため、一度目の調整は失敗してしまっていた。「ダーク」という言葉から「闇」という語彙を反射的に示してしまったものの、NNSの様子を見てからより適切な言葉を検索することができていた。

もう一例、「英語→日本語」の例をあげる。この会話例も、NNSによる自己マークから開始され



ている意味交渉である。

会話例16 意味交渉での「英語→日本語」の失敗例

- |    |                                                |
|----|------------------------------------------------|
| 01 | NNS-3: 日本の grass?                              |
| 02 | NS-2: うん.                                      |
| 03 | NNS-3: Grass はとても緑です.                          |
| 04 | NS-2: うん.                                      |
| 05 | NNS-3: モンゴルでは grass はちょっと:yellow? Yellowは何ですか. |
| 06 | NS-2: 茶色?                                      |
| 07 | NNS-3: あ, はい. ちょっと緑, じゃない.                     |
| 08 | NS-2: 緑じゃない. あんまり, 木とかないのかな? 木とか: お花とか.        |
| 09 | あんまりないんだ.                                      |

この会話例は、NNS-3が「Yellow」を日本語で言えなかったため、「Yellowは何ですか」と自己マークにより質問をしている例である。NS-3は「茶色」と訳してしまっており、英語を正しい日本語に訳せていないというやりとりが見られた。このように、英語を用いた調整では、NSの英語力不足が原因で調整が失敗することもあった。

この会話で観察された調整は「英語→日本語」のみであったが、コミュニケーションに問題が生じた理由の一つには、NSがNNSのマークに対応しなかったことも影響していると考えられる。この会話では、1行目にNNS-3が「日本のgrass?」と上昇調で発話し、日本語の表現を引き出そうとしているようである。しかし、NS-2は「うん」と相槌のみで調整しておらず、NNS-3は「Grassはとても緑です」と、英単語のまま会話を進めている。その結果、NNS-3の「モンゴルのGrass(草)は緑じゃない」と表現したかった発話を、母語話者が「木や花がない」、つまり「自然が少ない」と捉えてしまっており、調整に失敗していた。このように、調整が行われないことで、その後会話で誤解が生じる恐れがあるため、NSからの積極的な意味交渉も必要なのではないかと考えられる。

このように、調整の失敗は、NSがNNSの日本語力を適切に評価できず、NNSが理解できる表現を提示できなかつたり、NNSが何が理解できなかつたのかが判断できなかつたりした点や、NSの英語力の不足が原因であると考えられる。また、NSが積極的に意味交渉を行わないことによって、やりとりに問題が生じることも示唆された。

### 4.3.2 NSの発話が原因で生じた意味交渉での調整

#### 4.3.2.1 調整の出現頻度と成否

次に、NSの発話が原因で生じた意味交渉、つまり、NSがNNSに情報を伝える必要がある場面の分析結果を報告する(表6)。この調整では「言い換え」が16回(単独9回、言い換え同士の組み合わせ1回、繰り返しとの組み合わせ6回)、「繰り返し」が7回(単独1回、言い換えとの組み合わせ6回)と、NNSの発話原因で生じた調整と同様、「言い換え」が多く観察された。その中でも多く観察されたのは、NSが日本語で発話した内容を「日本語→英語」で言い換えようとした調整で、7回(単独3回、組み合わせ4回)観察された。次に多く見られたのが、「説明」の6回(単独4回、組み合わせ2回)であった。

成功率に注目すると、一番多く使用された「日本語→英語」は57%(成功4、失敗3)と低かった。「説明」は67%(成功)であった。

NSの発話が原因で生じた意味交渉は、ほとんどがNNSによる他者マークで開始されており、NSによる自己マーク<sup>4)</sup>はあまり観察されなかった。事前自己調整は19回とまとまった回数が見ら

表6 NSの発話が原因で生じた意味交渉での調整方法の頻度とその成否

上位カテゴリー	下位カテゴリー	NSによる自己マーク				NNSによる他者マーク				合計
		成功	失敗	不明	計	成功	失敗	不明	計	
言い換え	説明	-	1	-	1	1	1	1	3	4
	日本語→英語	-	-	-	-	1	2	-	3	3
	日本語→日本語	-	-	-	-	2	-	-	2	2
繰り返し	調整繰り返し	-	-	-	-	1	-	-	1	1
言い換え+ 言い換え	英語→日本語, 日本語→英語	1	-	-	1	-	-	-	-	1
言い換え+ 繰り返し	説明, 繰り返し	-	-	-	-	1	-	-	1	1
	説明, 部分繰り返し	-	-	-	-	1	-	-	1	1
	日本語→英語, 調整繰り返し	-	-	-	-	1	-	-	1	1
	日本語→英語, 部分繰り返し	-	-	-	-	1	1	-	2	2
その他	--	1	-	-	1	-	-	-	-	1
	合計	2	1	0	3	9	4	1	14	17

れたことに鑑みると、NSは自身の発話に問題があると感じた場合は、マークを表示する前に調整を行っていたためなのではないかと考えられる。

#### 4.3.2.2 成功率が高い調整方法

NSの発話が原因で生じた意味交渉は回数が少なく、傾向が観察できるほどではなかったが、「日本語→日本語」や日本語を使用した発話内容の「説明」などは比較的スムーズに成功していた。成功例として、「説明」の調整例をあげる。

##### 会話例17 意味交渉での「説明」の成功例

01	NS-1:	へ∴, いいね: <u>多趣味</u> だね.
02	NNS-1:	(2) ん?
03	NS-1:	多趣味. (2) <u>たくさん</u> , <u>趣味がある</u> ね.
04	NNS-1:	私の?
05	NS-1:	うん
06	NNS-1:	あ∴, ん∴, あ, ちょっと, ありません.

この会話では、NS-1の「多趣味」という語彙が理解できず、NNS-1が2秒程度の沈黙を置いた後「ん?」と他者マークをすることで意味交渉が開始されている。NS-1は一度「多趣味」と発話の一部を繰り返し、2秒程度間を置いてNNS-1の反応をうかがっているようだが、特に反応が得られなかったためか、「たくさん、趣味があるね。」と「多趣味」の意味を説明している。

このように、NSの発話に問題に対してNNSが指摘をした場合、NSは相手の反応を観察しながら日本語を用いて言い換えたり、発話内容を説明したりしていた。しかし、NNSが何に不理解を示しているのかが把握できない場合は調整に失敗することもあった。その例として会話例18を示す。

会話例18 意味交渉での「説明」の失敗例

01	NS-1:	そっかそっか:: え::, <u>じゃあ日本の方が::学校に行くのはちょっと</u>
02		<u>楽かな? 電車があるから.</u>
03	NNS-1:	(3) ん? もう一度 <del>¥</del> お願いします¥.
04	NS-1:	<u>えっとネパールで学校に通うより::, 日本で: 学校に通う方が::,</u>
05		<u>楽ですか?, どちらが楽かな.</u>
06	NNS-1:	ら[く::なんですか? [らくは,
07	NS-1:	[バスと( ) [バスと::, ん?
08	NNS-1:	楽はなんですか.
09	NS-1:	楽は::, easy.
10	NNS-1:	あ:: あ::日本で::, あ::, 楽?です.
11	NS-1:	じゃあ日本の方が楽か.
12	NNS-1:	はい::

まず、1-2行目でNS-1が「じゃあ日本の方が::学校に行くのはちょっと楽かな?」と、質問をしている。NNS-1は3行目でその質問が理解できず、聞き返している。NS-1は最初の質問では比較対象である「ネパールで学校に通う」がなかったため理解できなかったと想定し、1-2行目での質問の意味を文レベルで言い換え、どのような質問であったのかを説明している。しかしながら、NNS-1が理解できなかったのは「楽」という語彙であったため、説明による調整では発話の意味が理解できず、6行目でNNS-1が「楽」の意味を聞くことによって、さらに意味交渉を続けていた。最終的には、NS-1が9行目で「楽は::, easy.」と、「楽」の英語訳を提示することで相手に意図が伝わり、意味交渉が終結していた。

このように、NSがNNSが理解できない理由を的確に特定できない場合は、NSが的確に調整ができず、意味交渉を繰り返すことがあった。これは、NSがNNSの日本語能力を適切に把握できず、何が理解困難なのかを特定できなかったためだと考えられる。

4.3.2.3 成功率が低い調整方法

表6の通り、NSの発話が原因で生じた意味交渉は、組み合わせによる調整も含めると「日本語→英語」が6回と一番多く観察された。傾向が観察されるほど数は多くはないものの、6回中3回が失敗しており、失敗する可能性が高いことが予測される。

次の会話例は、NSの発した「トレーラー」というカタカナ語がNNSにすぐに理解されず、NNSによる他者マークをきっかけにNSが調整を行った例である。

会話例19 意味交渉での「日本語→英語」の失敗例

01	NNS-5:	次の学期は:, ( )、【サークル名】を, 続, き, ますか?
02	NS-3:	ん::, 続けたいけど::, 続けたいけど: (笑), 続けたい, ん:
03		続けるかな. ちょっと忙しい::, よね, やっぱり, 【サークル名】
04		やってると, 忙しいですね. 今は <u>トレーラー?</u>
05	NNS-5:	ん?
06	NS-3:	<u>Trailer?</u>
07	NNS-5:	テイラー?
08	NS-3:	<u>Trailer? For event?</u>
09	NNS-5:	ん::
10	NS-3:	そうそう, を作ってるから忙しい.
11		ん::, でも, 楽しいから続けようかなって, 思ってる.

この会話例では、4行目のNS-3がイベントの広報用の動画、「トレーラー」を作っているということ伝えようとする発話がNNS-5に理解されず、これが問題のある発話となっている。NNS-5は、「ん?」という他者マークによって聞き返し、その発話に問題があることを表示して意味交渉が開始している。NS-3は英語の発音にシフトしてもう一度「Trailer?」と述べているが、それもうまく伝わらず調整が失敗している。NSはもう一度「Trailer?」を繰り返す、さらに「For event?」と文脈を追加することで、相手に発話を伝えられていた。6行目の調整では文脈もなく、自信がなさそうに小さな声で英単語のみを提示していたために、相手に伝わりにくかった可能性が考えられる。

このように、NSの発話が原因で意味交渉が生じた場合は、英語に頼った調整が行われることが多いが、成功率は低いことがわかった。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では、東京国際大学で実施されているCP活動に焦点を当て、CP活動中にNSがどのように発話を調整しているのかに注目した。研究課題(1)「NSはやりとりに支障が生じる前に、どのように自分の発話を調整しているのか」という問いに対して、全体の頻度は多くないものの、「日本語→日本語」の調整が他の調整方法よりも多く見られ、成功率が高いことがわかった。NSはNNSからの不理解表明やミスコミュニケーションを事前に回避しようと「やさしい日本語」を用いて会話を進めようとする様子が観察された。ただし、本研究で分析対象とできたのは、一旦NSが述べた発話や言いかけた発話を言い直したもののみであった。NSが言い換えを行う前に、相手が理解しやすいように「やさしい日本語」が使えていたかどうかは判断が難しく分析対象とはできなかったため、本研究で分析対象としなかった発話でもNSが積極的に「やさしい日本語」を使っていた可能性が考えられる。

次に、研究課題(2)の「NSはやりとりに支障が生じた場合、どのように意味交渉を行い、調整しているのか」という問いに対して、本研究では、日本語教育の経験や知識がないNSも、多様な方法で調整を行うことがわかった。特に、NNSの発話に対するNSの調整では、NNSが断片的に発話しながら表現を探している際、NSが発話を「要約・完成」させるという調整が多く、成功率も高い傾向が見られた。一方、「英語→日本語」の言い換えによる調整も数は多かったものの、成功率はあまり高くなかった。これは、特にNNSが自分の発話に対して自己マークを行い、NSが調整をしようする場合に顕著に見られ、NSがNNSの英語の発話を日本語にする際に失敗する傾向にあった。また、NSの自己調整では、数は多くなかったものの日本語を用いた「説明」や「日本語→日本語」の調整は成功することが多かったが、英語を用いた調整では失敗する様子が多く見られた。NNSとの接触場面において、日本語教育経験のないNSも調整を積極的に行っていたが、その方法によって成功率が異なることがわかった。しかしながら、NSは一度調整に失敗しても、調整を再度行ってやりとりを進めようとする様子も頻繁に観察された。

以上のように、本研究では言い換えによる調整が多く見られたが、この結果は繰り返しによる調整が多く見られた大平(1999)とは異なる傾向であった。大平(1999)の調査では、本研究とは異なりNSとして日本語教育経験者が参加していたため、日本語教育経験や知識が影響した可能性が考えられる。日本語教育経験者は相手の理解を発話の繰り返しによって確認するが、本研究のCPのように日本語教育経験のないNSは言い換えによって別の語彙や表現でコミュニケーションを進める傾向があると考えられる。また、大平(1999)は繰り返しの成功率は高くなかったと

報告していることから、本研究では成功率が低い「繰り返し」による調整が避けられた可能性も考えられる。

また、本研究で特徴的だった点として、「英語→日本語」や「日本語→英語」の調整の成功率があまり高くなかった点もあげられる。本研究では、NNSが適切な日本語表現が言えなかった場合は英語を使用したり、NSにおいても英語単語を使用したりする傾向にあった。原因としては、まずNSの英語能力が高くはなかったことが考えられるが、それに加え、意味交渉において文脈を与えずに英単語のみを提示してしまうという方略上の問題も見られた。そもそも、調整に英語が多用された要因としては、本研究で調査対象としたNNSが全員、英語で学位を取得するプログラムに在籍している留学生で、英語が堪能であったことがあげられる。接触場面では、共通言語がある場合はそれを用いて意思疎通が行われるのは自然なことではある。実際、CP活動終了後に調査協力者のNSに実施したアンケートでは、英語の使用に関してCP4名全員が「必要だ」と答えており、英語を重視していたことがわかった。その一方で、本研究の結果からは、NSの言語能力によっては単に他の言語で言い換えればすぐに調整が成功するわけではないことが示唆され、英語の使用については注意が必要であるといえる。

このアンケートからは、CPが英語を使用する重要性を感じていた一方で、「やさしい日本語」を意識しながらCP活動に従事していたこともうかがえた。CPが活動中に意識した話し方を尋ねたところ、「通じない言葉を別の言葉に言い換える」「一文を短くする」を4名全員が意識したと回答しており、「やさしい日本語」を使用しようとしていたことがわかった。CPへは、CP活動の事前研修として「やさしい日本語」についての知識や言い換えの練習を指導したが、実際のデータでも「日本語→日本語」の言い換えや、日本語による説明の成功率が高いことが観察されたことから、「やさしい日本語」がCP活動において役立ったといえるだろう。

このように「やさしい日本語」は有用だといえるが、本研究の結果からは事前自己調整では「やさしい日本語」が使用できていたものの、意味交渉が生じた場合は前述のように英語に頼る傾向も見られた。また、日本語を使用して調整をしようとした場合でも、NNSの日本語能力を的確に推測できず、調整した日本語発話が失敗に終わる様子も観察された。CPのアンケートの回答からは、「やさしい日本語にしようと思っていたが、なかなかクリアな日本語でお話することが難しかった。あとから意味を付け加えたり、文の構成をわかりやすくするために少し時間がかかったりしたことで留学生を混乱させてしまったかもしれないと感じた。」という記述が見られ、「やさしい日本語」の使用に困難さを感じていた様子が見られた。成功率の高さからは「やさしい日本語」を用いた調整を積極的に使用することが円滑なコミュニケーションにつながる可能性が考えられるが、それを容易に行うことができるようにするためには、「やさしい日本語」を用いた意味交渉の方法に関して、指導をしていく必要があると考えられる。

加えて、本研究のデータではNSがそもそも調整が行えていないこともあった。会話例16のように、一見会話がうまく進んでいるように見えても、それぞれが誤解に気づかないまま会話が進む様子も見られた。このように、調整が行われないことで、その後の会話で誤解が生じる可能性がある。誤解が生じたまま会話が進むことはNS同士の会話でも度々起こることであり、接触場面において必ずしも回避すべきこととは言い難い。しかし、NSが誤解に気づいた際には、自らこまめに理解確認を行うことで、CP活動という限られた時間内のコミュニケーションが円滑に進み、NNSに多くの発話機会を与えられるのではないだろうか。相手の発話を確認することが有用であることは、柳田(2010)でも指摘されていることから、それを解決するための指導が必要なのではないかと考えられる。

最後に、今後の課題について言及する。本研究で用いたデータは、NS 4名、NNS 6名、計6組の会話と限られており、CPの経験年数も統制することができなかった。多くの先行研究ではNNSとの接触経験が調整方法に影響することを指摘しているため、CPの継続年数によって調整の特徴が異なる可能性もあるのではないかと考えられる。本研究で得られた結果が一般化されうるものなのか、対象者の特徴を統制したうえでデータ収集を行い更なる検討をしたい。また、本研究のデータでは、一度調整が失敗したのち、異なる方法で調整を試みる様子が多く観察された。本研究ではそれぞれ別の調整として分類したが、その調整の展開も重要な要素であると考えられる。やりよりの流れを意識した分析も行いたい。

## 注

- 1) 増井 (2005) は、「コミュニケーション破綻を修復するために行われる談話レベルの調整 (増井 2005 : 2)」のことを「修復的調整」と呼んでいる。
- 2) 雷 (2021) は「自己修復」とは、「トラブルの発話の話し手本人が修復を行うこと (雷 2021 : 80)」としており、本研究の「自己調整」に合致するものである。
- 3) 成功率は、調整が単独で用いられた場合と、複数が組み合わせられて用いられた場合を合計して算出した。また、調整方法によっては出現した頻度が少なかったため、すべての調整方法についての成功率は記述せず、回数が多く見られたものの記述のみに留めた。
- 4) 本研究ではほとんど観察されなかったため、具体例の記述はしていないが、NSの発話が原因で生じた意味交渉において、NSが自己マークを行うということは、自分の発話についてNNSの理解を明示的に確認した後、調整を行うものが該当する。

## 会話スクリプトの記号一覧

[	オーバーラップの開始部	(文字)	聞き取りが曖昧で確定できない発話
(数字)	沈黙の長さ	∴, ∴	直前の音の引き延ばし
.	下降調の抑制で発話	,	直前部分が継続を示す抑制で発話
?	直前部分が上昇調の抑制で発話	(笑い)	笑い声
¥文字¥	笑いながらの発話		

## 参考文献

- 庵 功雄 (2009) 「地域日本語教育と日本語教育文法: 「やさしい日本語」という観点から」『人文・自然研究』3, 126-141.
- 大平未央子 (1999) 「接触場面の質問-応答連鎖における日本語母語話者の『言い直し』」『大阪大学留学生センター研究論集多文化社会と留学生交流』3, 67-85.
- 久保亜希・稲垣みどり・大住あかり・齊藤佑太郎・柴田 冨・高野真理・横田賢司 (2020) 「『会話パートナー』の実践における日本人学生・留学生の学びの可能性」『2020年度日本語教育学会春季大会予稿集』432-437.
- 徳永あかね (2009) 「多文化共生社会で期待される母語話者の日本語運用力——研究の動向と今後の課題について——」『神田外語大学紀要』21, 111-129.
- 増井展子 (2005) 「接触経験によって日本語母語話者の修復的調整に生じる変化——共生言語学習の視点から——」『筑波大学地域研究』25, 1-17.
- 宮崎里司 (1999) 「第二言語習得とコミュニケーション調整モデル」森田良行教授古稀記念論文集刊行会 (編) 『日本語研究と日本語教育』明治書院, 368-380.
- 村上かおり (1997) 「日本語母語話者の『意味交渉』に非母語話者との接触経験が及ぼす影響——母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて——」『世界の日本語教育』7, 137-155.

- 柳田直美 (2009) 「接触場面における母語話者の情報やりとりの特徴の記述——情報やりとりの発話カテゴリーの設定に向けて——」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』24, 51-68.
- (2010) 「非母語話者との接触場面において母語話者の情報やり方略に接触経験が及ぼす影響——母語話者への日本語教育支援を目指して——」『日本語教育』145, 13-24.
- 雷 雲恵 (2021) 「相互行為の参加者はどのように発話のトラブルに対処するか——接触場面における日本語母語話者の「自己修復」に着目して——」『言語文化研究科紀要』7, 79-101.
- McHoul, A. W. (1990). The Organization of Repair in Classroom Talk. *Language in Society*, 19(3), 349-377.
- Schegloff, E., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation. *Language*, 53, 361-382.